東方幻落人～東方キャラクターが異世界に行っちゃう話～

rye

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方幻落人～東方キャラクターが異世界に行っちゃう話～

【Ｎコード】
Ｎ０５８６Ｗ

【作者名】
ｒｙｅ

【あらすじ】
東方ｐｒｏｊｅｃｔと銀魂ほか多数のアニメキャラ（ゲームも）がコラボしています。
東方キャラが異世界へと行ってしまう話です。
あらすじが似てたりしてたらごめんなさい。
めちゃくちゃな話になりますがよろしくお願いします。

第1話　東方のゲーム大体買ってても永夜抄しかまだクリアできない（作者談）

どもども、ｒｙｅといいます。
てきと…じゃなくて、頑張っていきますのでよろしくお願いします。

第1話　東方のゲーム大体買っててもまだクリアできない（作者談）

此処は幻想郷。
海がなく、妖怪やら人間やらたくさん住んでいる。
そして妖怪は当たり前のように人間を襲う。時には食べてしまう。
それでも普通の魔法使いこと、霧雨魔理沙（きりさめまりさ）は平気でいた。
彼女は魔法の森を歩いていた。何かを考えながら。

「あぁーどうしよ…うかな」
魔理沙は途方にくれながら困っていた。

「八卦炉…がねぇ」
魔理沙は実はというと、ミニ八卦炉をなくしていた。
ミニ八卦炉は魔法の森で落としたらしいが。
「あれがないと…困るぜ…」
そのときだった。後ろから物音がしたのが魔理沙にはわかった。
どうせ三妖精あたりと思ったが全然違った。
奥のほうだった。歩いてた道よりもずっと奥だった。それにしては変だと思った。
魔理沙は普通、大きな音だと思った。でもそれが小さな音で、ささやかれたような音なのになぜか奥だと思った。
「行ってみようかな…でも…」
ミニ八卦炉と奥のほうが気になる魔理沙は結局奥へと歩き出した。

「案外暗いような気がしてきた…昼なのに…まさか私の頭が狂ったか？なんてな…」
そんな独り言を言いながら箒を引きずって奥まで歩いた。
飛ぶよりめんどくさいと思うが、どっちにしろ人ってのは歩くため

にも生きている。まぁ、当たり前だろうけど。
そして、魔理沙は八卦炉のことを忘れて奥へと歩いた。

「おっ、八卦炉あったぜ！」
数分後、奥を歩いて何分か経った。ミニ八卦炉は奥のちょっと遠い場所にあった。
「何でここにあるんだか…きっと箒で飛んでた時に落ちたのかな…でもなぁ…」
今日は箒で散歩をしてたが、ミニ八卦炉はその時にはあった。それにここを通ったが通り抜けた後にはまだあった。
魔理沙はよくわからなくなってきた。もうなにがなんだかわからない。
「めんどくさいぜえええええええ！！！」
魔理沙は疲れ果てる。すると目の前に黒い渦があった。魔理沙は目を丸くして驚く。
でも少し落ち着くと、あのスキマ妖怪の仕業と思った。スキマとは全然違うものだったけど。

「とりあえず…行ってみるか…っておい？！」
そこに広がっていたのはなんとも和風な古い町並み。まるで幻想郷にある人里のようなものである。
だがそこには変な生き物が人間と同じように歩いていた。人間はそれを気にせず魔理沙へ目を向けた。
ひそひそと魔理沙に向けて話をしていた。珍しいのは言うまでもない。
「なんだぁ…？此処の町は…」
呆然としていた魔理沙は地面に座りこむ。
驚きを隠せないまま、何も考えていない魔理沙。
「人里…じゃねえよなぁ…アハハ……」
魔理沙の頭の中はめちゃくちゃになっていて、何もかも忘れてしま

ったかのように動かなくなった。
そして急に我を取り戻したが、目の前の黒い集団に目をやる。
「…うわぁ、黒いぜ…って、私もか」
魔理沙はどうでもいいと思いながら黒い集団…真選組を無視する、そして何もなかったかのように通り過ぎようとした。
が。
「おいおい、待ちやがれって…悪いようにしねえからなァ…ってあ？」
魔理沙は少し茶色っぽい髪の男に止められたがそれをするりとかわしては弾幕を放ってきた。
「私をなめるんじゃないぜ！！！」
魔理沙は真選組が自分を警戒しているにもかかわらず、スペルカード、略してスペカを取り出した。
そしてスペカの名を声に出して放った。キラキラと光る星の弾幕を放って箒で空を飛ぶ。
「魔符「ミルキーウェイ」！！」
星の弾幕は無数に舞いながら真選組を襲ってくる。それをみた人間と天人（あまんと）は綺麗だなーと言わんばかりの表情で弾幕を見ていた。
「てめぇ！これ以上暴れると…ってうわっ」
黒髪の男は弾幕にビビりながら弾幕を避けていく。ほかの隊員たちも弾幕を避けていくがほとんどが当たっていく。
「ていうか作者！何でおれだけビビりとか言って」黒髪の言っていることはスルーで。「おい！」
「ぺちゃくちゃいってないで、弾幕に集中すればいいんだぜ！！」
魔理沙は隊員たちをほとんど倒し、次のスペカを取り出す。もちろん、あの有名なスペルカードである。

「面倒なんで、俺が潰してやりまさァ！」
茶髪っぽい男は大砲みたいなのを取り出し、ってどこから…じゃなくて、魔理沙に銃口を向け、発砲した。
「そんなもんじゃぁ、わたしのマスタースパークは壊せないぜ！！」
魔理沙はスペカとミニ八卦炉を取り出し、言い放つ。星と極太なレーザーを放っていく。
「恋符「マスタースパーク」！！弾幕はパワーだぜ！！」
隊員、そして茶髪っぽいの男と黒髪の男を飲み込んでしまった。魔理沙はあっけないとひとこと言ってからすたこらさっさーとどこかへ言ってしまった。
「適当にぶらぶらするぜ」

第1話　東方のゲーム大体買っててても永夜抄しかまだクリアできない（作者談）

適当ですいません、頑張って書いていきますのでよろしくお願いします。

番外編　早い番外だけどいいよね（ドヤッ（前書き）

いきなりすぎてごめんなさい。

番外編　早い番外だけどいいよね（ドヤッ

とある空間～

魔理沙「ヤッホー魔理沙だぜ」

ｒｙｅ（以下らいで「どもども、らいです」

魔理沙「何で急に番外編なんだよ」

らい「へっ、えと…時間的に…怖いから」

魔理沙「はぁ！？」

らい「聞かないでください」

魔理沙「ああ…わかったぜ」

らい「まぁ、この番外編ではキャラ募集、質問、アドバイス待っています！」

魔理沙「作者とゲストキャラが番外編の時にコメントするから楽しみにしておくといいぜ！！　…これだけか？」

らい「はい、これだけ」

魔理沙「いいのかよ」

らい「た、たまに、番外編のお話も書きます！！」

魔理沙「……そうか」

らい「とりあえず、頑張りますのでよろしくお願いします」

魔理沙「じゃあ、今日はここまで！」

らい「ありがとうございました！」

番外編　早い番外だけどいいよね（ドヤッ（後書き）

キャラ募集、質問、アドバイス待っています！

第2話　スペカで一番怖いのはやっぱりフランちゃんかこいしちゃんって作者は

遅くなってごめんなさい。

第2話　スペカで一番怖いのはやっぱりフランちゃんかこいしちゃんって作者は

魔理沙が見つけた先には万事屋銀ちゃんという看板とともに建物があった。
魔理沙はでっけー建物だなぁと思いながら気になったので入ってみることにした。人間たちの目も気にせずに。
（幻想郷にどうやって帰るか気になるしな）
「はわー、1階って閉まってるのか？なんか変だな…」
魔理沙は1階を覗く。何秒か経つと後ろから肩を叩かれた。
「はひ？！」
驚く魔理沙は後ろを振り向いた。そこには綺麗なメイドが立っていた。
一瞬、紅魔館のメイド長・十六夜咲夜（いざよいさくや）と思ったが全然違った。
「誰でしょうか…お登勢様にご用ですか？」
優しそうな顔、緑髪、そして綺麗な簪。着物とエプロン。『スナックお登勢』で働くからくり家政婦通称・たま。
「様って…咲夜と同じような従者か何かか？……銀ちゃんってやつに用があるだけだ」
「…では、上に上がればいらっしゃるはずなので「おう！ありがとな！！」
魔理沙は2階に上がって行ってしまった。たまはそれを見て不思議そうに魔理沙を見上げるのだった。
「……大丈夫でしょうか…まぁ…銀時様なら…大丈夫かと…」
万事屋～
「銀ちゃん、暇アル」
赤いチャイナ服を着たお団子ヘアーの女の子・神楽は犬の定春に横

になって寝転がっていた。
「暇暇言ってたらますます暇になるだろ、暇だあああああああ」
よくわからない着物を着たおっさ…白髪天然パーマは坂田銀時。
「あんたも暇って言ってるじゃん、同じじゃん」
ダメガネこと、志村新八。うるせーメガネ、ちょっと黙ってろ。

「何で僕の扱いひどいんだ…？ふざけんなあああああこの？作者！！！」
「俺のことよくも天然パーマって言ったなああ！！！」
いいじゃん。そういう設定でしょ？
「てめー後で覚えとけよ」
銀時は威嚇しつつ、あせっている。だが気にしないでほしい。
「いや、あせってねーし、なんか説明おかしくね？」
冷静に対応する銀時。
「いいじゃん、作者も？言われて気にするどころかスルーしてるネ」
「男じゃない神楽ちゃんにはわからないよ」
新八が目を細くして言う。ダメガネが調子のるな。
「お前いい加減にしろおおおおおおおおおおおおおお！！！」
「同感アル。銀ちゃんも同類ネ」
「うん、もういいや、どうでもいいや」
初登場のくせに偉そうな銀ちゃんですね、わかりまｓ（ｒｙ

「…騒がしい…」
魔理沙は玄関先で困っていた。
これじゃあ、入るにも入れない。
「魔符「スターダストレヴァリエ」」
スペカを発動させる魔理沙。たくさんの星が万事屋を撃ち落していく。部屋中ボロボロである。
魔理沙はやりすぎたと思って何もなかったかのように逃げようとする。

「し、失礼しました…」
「と思っていたのか…御嬢さん？」
魔理沙の後ろには、銀時、神楽、新八がいた。３人ともキレている。
「いきなり挨拶もせずに攻撃とはいい度胸アル…」
「そろそろ本気を出さないといけませんね」

少女困惑中～
（どうしよう…弾幕使ってもまたさらに怒るだろうし…」
魔理沙は思っていることが声に出ていた。
「弾幕？そんなことより」
「「「仕返しじゃあああああああああああああああ！！！」」」
「えええぇ…ちょっとおちつけってば」
魔理沙は３人が攻撃の仕返しをしてくることにあせった。
だがしかし。

「恋符「マスタースパーク」！！」
極太レーザーと星は３人を飲み込んでいく。魔理沙はその間に何事もなかったかのようにその場を立ち去る。
「何か前にもあったような…でも逃げるぜ！」

だが魔理沙にはある追手がいた…。

第2話　スペカで一番怖いのはやっぱりフランちゃんかこいしちゃんって作者は

短くてごめんなさい。いや次こそは（ｒｙ

頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0586w/

東方幻落人〜東方キャラクターが異世界に行っちゃう話〜

2011年11月17日17時06分発行